

危険思想？

高倉 輝

上

これは前の床波さんや今の水野内相れから誰だか知らぬが此の次ぎ内務大臣になる人への先づ相談である。

と言ふのは、不思議な自分の如きが危険思想家の一人にせられかけたか、それ共せられて了つて居るのか、乃至はせられかけたけれども途中でやまつて了つたか、無論そこは自分には少しも分らないが、兎に角、自分が此浅間の麓の雪の中に埋つて人とも世間とも離れて了つて夢中になつて戯曲の構想や小説の草稿やを作つて居る最中に、四国の国の方で一人淋しく暮らして居る自分の母の所へは、春早縁喜でも無い厳つい警官ががちやがちや帯剣の束を鳴らしてやつて行つて、やあお子息は何年に学校を出てそれから何をして居た事だの、いつから何の目的で信州へは行つた事だの、一体これまでにどんな本を出して居るかだのと、頻りにくどくど聞いて書取つて行つたと言ふのである。そして、滑稽なことには、其の警官には自分が三高出身だと言ふ事を幾ら説明して聞かせてもどうしても飲み込ませる事が出来なかつたと言ふので有る。

で、問題は、今自分達が抱いて居るやうな思想を危険だと思ふ思はないとはそれはいかにも向うの勝手に有つて少しも不服を言ふ仔細は無いので有るが、唯だ斯う言ふ交渉は、そんな高等学校の存在すら知らないやうな哀れな警官なんぞを間に入れる迂遠な間接なことは己めにし、向後誰らもせよもつもつと単端直截で、そしてもつと気持の好い取引で有りたいと思ふことである。

(『読売新聞』1923年1月17日)

下

○

そこで、一体どうして自分の如き一度もまだ文筆でも言論でもさう言ふ思想問題などに触れたことの無い者にさう言ふ起きたかと言ふと、それがまた実に滑稽至極である。

これは知つて居る人は少ないかも知らぬが、自分はロシアの文学が好きで、少しばかりロシア語を喋つた関係から、何でもロシアの事だと言ふと他人の事のやうな気がしない。そして、是も余人の知らない本では有るが、前にその方の翻訳集を一冊拵へた事が有る。所で、去年の春例のロシアの大飢饉がやつと日本でも問題になり出して、いち早く前衛社で寄附金募集をやり始めた。これは義理にでも一口乗らなくては済むまいと思つて、丁度その頃四国の自家に居た関係から附近の青年達と計つて青年会の主催で小学校を借りて教育会の後援で一日講演をして、その聴講料を青年会の手から寄附金の一部に加へて貰つたものだ。

所で、さて其の講演の当日になつて驚いたことは会場へ警官が三人やつて来た。警部補が一人部長が一人それにも一人平巡查と。それまでまだ一度も講演で警官の御厄介なんぞになつた事が無かつたので、これは少からず意外に思つたが、講演の方は注意一つ受けずに、無論中止ににもならず、殊に平凡凡に、迹では警官達と雑談をして別れて了つた。それは去年の六月であつたか七月であつたか、何しろ暑い盛りの頃であつた。所で、その時自分が言ふまでその警官の一人はロシアに飢饉のある事さへ全然知らなかつたので、警官なんと言ふものは新聞なんぞは読まないでも好いものかしらと思つて大いに愕いた事で有つた。所が、それよりも尚ほ驚いた事はそれは迹で分つたので有るが、その警官たちは実はその前日から泊り込んで来て、不断はどんな思想の人だの、学校では何を専門らした人だのと頻りに聞き廻つたと言ふのである。ロシアと言ふ名はそれほどまでに響くのかと思つて、實際驚嘆して了つた。

だが、無論迹はそれきりで済んだ事ともうすっかり忘れて了つて居ると、半年の余も立つた今になつて、その間一体何を調べて居たのか、書類がまたその警察へ廻つて行つて、これまで一体どんな本を書いて居るのかと留守宅へ聞きに行く始末は、それは一体迂遠なのかそれとも用意周到なのか。

○

遺憾なことに、自分はどの結社にも属し居らず、また主義者とも交際が無いが、遇然にも自分は今日本人の書く物の中では社会学者の書くものが一番好きである。雑誌を買つても、文芸ものなんぞは滅多に読まないが、主義者の書いたものだと評論でも自伝でも何でも読む。忙しくて半年ほど見ないけれども、雑誌の中では『我等』と『前衛』が一番好きである。作品でも出来上つたら一つ載せて貰ひに行かうかと思つて居た所で有つた。妙なものと並べるやうで有るけれども、堺利彦の書くあの面白い文章と、それから奥山の講釈と、此の二つが今の酒を飲まない自分の道楽である。

序でに、もう少し自分と謂はゆる危険思想と縁の有りさうなことを並べて見ると、自分は危険思想の本山幸徳秋水と同郷だと言ふこと、自分の母が秋水とは少時一緒に帆立貝の殻で蟹味噌を焼いて食つた間だった関係から、(秋水は蟹味噌が大好きだったさうだ)何だか懐しい気がするから、一つ其の著書を読んで見たいと前から思つて居るのだけれども、本が手に入らなくてまだ何も見ないこと、も一つ秋水にはあの名筆に感嘆して居て、自分がこれまで見た近頃の人で本当に感心したのは森鷗外先生と秋水とだけなのだが、しかし滅多に見る事が出来ないのも、何でも堺老の所には有ると誰かの話したつたから、一つ一度見せて貰ひに行かうかと思つて居たこと、それから、自分は行けたら今にもロシアへ行きたいと思つて居るけれども、自分がたよつて行く向うの連中は翻訳権なんぞを貰つた関係からしてバリモントだのメジコフスキイのと言ふ皆いま巴里へ亡命して居る、労働政府には至つて覚えのめでたく無い連中ばかりなので、万一此のままモスクワへ乗り込んで行つたとして第一あの大臣待遇潜・片山なんぞにさぞ苦い顔をせられるだらうと思つて、いらぬ事乍ら今から大いに気にして居る始末であること、まあそんなものである。

何しろ斯う世の中が窮屈ではやり切れない。何とかして皆もつとのびのびと暮らして行ける工夫は無いものか。

(信州沓掛、一月十三日夜)

(『読売新聞』1923年1月18日)